



「神様が人となった」

理事(豊中教会牧師) 秋山 仁

「言葉は、肉となってわたしたちの間に宿られた。」(ヨハネ福音書 1:14)。

クリスマスの奇跡、それは、神様が人として生まれたということです。

神様が人として生まれた。それは、神様が全く人と同じ経験をこの地上でされるために生まれたということです。神様が一人の人間として、悲しんだり、喜んだり、泣いたり、怒ったり、笑ったり、皆さんや私が体験しているような、そうした経験をするということです。

そして、何よりも人の世の不条理さや無情といった経験の中に生まれたということです。人々を取り巻く「世間のしがらみ」や「常識」があります。「世間のしがらみ」や「常識」は、ともすれば、人を生きにくくさせるような力をもっています。

例えば、マリアは、聖霊によって身籠りますが、表立っては結婚前の妊娠でしたから、いくら許嫁のヨセフが受け入れたとしても、あとあとなにかと人の口に、噂話には上りません。イエス様は、「マリアの子」と呼ばれたりもします。父親の名前では呼ばれないで、母マリアの名前で呼ばれるところに、マリアとヨセフの家族を取り巻く周囲の人間が、どのような目で見ていたのかが明らかになります。また、マリアとヨセフは、イエス様を生むときに、ベツレヘムに住む親戚からは、手を差し伸べられることはありませんでした。たぶん、結婚前の妊娠が分かった時点で、親

戚も彼らと行き来するのを止めたのでしよう。彼らは孤立していました。「世間」の無情さの前で。

しかし、神様はあえてそのような「世間」の中に、そうした生き辛さを感じさせる力の働いているところに人として生まれたのです。なぜなら、そうした人を生きにくくさせている力や関係を、神様は打ち砕くことを望んでいるから。そして、それはまた人を生き辛くさせる力のもとで、孤立している人たちとその辛さを分かち合うためなのです。野宿しながら夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いたちに、天使が「あなたがたの救い主がお生まれになる」と告げたように。だから、神様は人となられたのです。

由木康という日本人が作詞した、「この人を見よ」という讃美歌があります。

「まぶねの中に産声上げ/大工の家に人となりて/貧しきうれい、生くる悩み、/つぶさになめし、この人を見よ。

食するひまもうち忘れて/虐げられし人を訪ね/友なき者の友となりて/心砕きし、この人を見よ。

すべてのものを与えし末/死のほか何も報いられで/十字架の上にあげられつつ/敵を赦しし、この人を見よ。

この人を見よ、この人にぞ/こよなき愛はあらわれたる。/この人を見よ、この人こそ/人となりたる、生ける神なれ」

イエス様の弟子たちは、まさにこの歌詞に

あるイエス様の生きた姿の中に、キリスト・救い主を見たわけです。彼らは、イエス様の言葉、教え、癒しのわざに、貧しい者への福音と、苦難からの救いと解放を見たのです。イエス様が十字架に架けられる苦難は、人々の苦しみを担う姿として、受け止められます。復活は神様によるこの世の力への勝利であ

り、イエス様を通して神様が人々と共にいることを示していると認めて行くのです。クリスマスとは、このような生き方をされたイエス様がこの地上においてになったことを覚える日です。イエス様の言葉、教え、癒しのわざに、貧しい者への福音と、苦難からの救いと解放が、私たちの希望があります。



「よろしくお願ひいたします」

この度、理事の大役を承りました日本福音ルーテル賀茂川教会の会員の森本典子と申します。諸先輩方が力を尽くして支えて来られた、るうてるホームからお声をかけていただいたことを大変光栄に思っております。

その一方で、お声掛けをいただいた時には、どうして私にと大変驚いたことも事実です。ルーテル教会の女性会の皆様が長い間力を注ぎ、支えてこられた働きに女性会に縁遠い私がどうして、他にふさわしい方がいらっしゃるのではないかと思ったからです。しかし、「ディアコニアの面からいろいろと関わってほしい」とのお言葉をいただき、お引き受けすることにいたしました。

私は、1999年、デンマークディアコニア事業団という団体に属するディアコニア共同体でディアコーンになりました。ディアコーンとは、執事、奉仕をする者、仲介者などの意味があり、キリスト教会が始まった時には、礼拝の中で聖餐式のパンや葡萄酒を分ける役割をしていました。しかし、時は移り現在、特にルター派の教会では、キリスト教の思想に基づいて教会や社会福祉施設、もしくはその他の場所で福祉的な働きをする役割を担う者となりました。私は、デンマークで教会のディアコーンとして働き、コペンハーゲンの中央にほど近い2600人ぐらいが住む小さな教会の教区で、

理事(関西学院大学) 森本典子
地域の人々のために教会の福祉的働きの側面を支えました。小さな子供と保護者のための居場所づくりから主に高齢者の参加が多い礼拝後のお茶会まで、地域住民のための働きは多岐にわたりました。

2001年に日本へ戻ってきてからは、以前勤めていた釜ヶ崎ディアコニアセンター喜望の家でパート職員として働く傍ら、ディアコニアについての学びを深めました。現在は、関西学院大学神学部のディアコニアプログラムでいくつかの授業を担当しています。前任者から引き継いだ授業の中には、るうてるホームのお話を聞く時間もあり、神様の計らいを感じています。

神様が創造された一人ひとりを大切にするというディアコニアの基本精神を日々実践されているるうてるホームの働きに、このような私の経験が少しでもお役に立つならばうれしい限りです。

神様と皆様のお力をお借りしながら、与えられた役目を果たしていきたいと思っております。

なにとぞよろしくお願ひいたします。



「るうてるフェスタについて」

地域交流委員 河内 美和

2013年、この地区にるうてるホームは移転してきました。2014年、外からだけではわからない部分を色々な方に知っていただき、誰もが出入りしやすい開かれた施設を目指し、施設見学をしていただける形で始めました。

参加型のフェスタを目標とし、ボランティアさんや障がい施設の方と共に創る祭りを目指しています。地域交流委員会ではコンセプトを毎年検討し、その時期にあったもの、大切にしたいことを明確にして取組んでします。また、ボランティア、障がい事業所とは合同説明会を行い、お互いの活動内容の発表やコンセプトの説明等、顔合わせを事前におこなっています。年々、交流の輪が深まっているように感じています。

フェスタの仕掛けとしては、地域との交流が図られるよう、手作り等の企画にも力を入れています。今年はその準備段階にて、ケアハウス入居者にボランティアを依頼し、一緒に取り組みました。事前に地域交流委員と顔の見える関係となり、フェスタを楽

しみにしていただけることができました。

また活動により、得意なことを知る機会になりました。ボランティアさんへは、法人内での日頃の活動内容を披露していただいています。障がい事業所も少しずつ増え、7事業所に来ていただき、自主製品や活動内容を地域の方にお知らせする機会としています。

入場者数については開催当初は100名でしたが、今年度は400名となりました。知名度が上がり、多くの方に来ていただけるようになりました。これも継続し、活動してきた賜物だと思います。来客層も年配の方からお子様連れの家族、お孫様ときてくださる方等、年齢問わずたくさんの方が来場して下さいました。

これからも地域の開かれた施設、地域に密着し、寄り添える施設となり、たくさんの方の交流の場となる様、このるうてるフェスタを継続し、地域に根差したものにしていきたいと思っています。

「窪寺俊之先生の講演を受けて」

地域支援事業部長 高田 真希

るうてるホームではここ数年、「スピリチュアルケア」をテーマとした研修が毎年行われています。今年度は、聖学院大学の窪寺俊之先生が「高齢者に対するスピリチュアルケア」をテーマにご講演くださいました。

先生によれば、両親、友人などとの人間関係を〈横の関係〉、神あるいは大いなるいのち、人間を超えたものとの関係を〈縦の関係〉とした時、縦の関係の中で、人生の土台となっているもの、基本的価値観、宗教に関係なく誰もが生まれながらにもっているものが〈スピリチュアリティ〉であり、スピリチュアルケアの目的は「その人のスピリチュアリティ（霊性）を見出し、理解し、サポートして、その人が安心し、希望を持

って生きることを支える」ことです。スピリチュアルケアの方法としては、当事者のライフストーリーやスピリチュアリティを傾聴することなどがあり、先生から、それぞれ自分自身が行えるスピリチュアルケアを考えてほしいとのメッセージをいただきました。

講演の内容はもちろん、先生の穏やかで温かな語り口や表情、雰囲気はたいへん魅了されました。まず、そのお姿に大きな学びをいただいたと思っています。

また、私には〈縦の関係〉という言葉が印象に残りました。私自身は様々な方々との死別を経験する中で、死してもなおそれまでの関わりに支えられている、死者にケアされながら生きていると思うようになりま

